

# 麦野 A 遺跡 7

—第20次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1056集

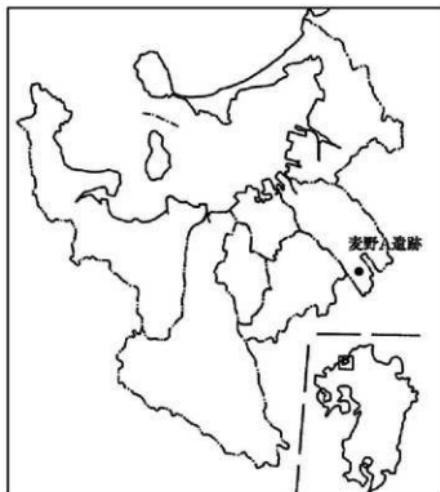
2009

福岡市教育委員会

MUGI NO  
麦野 A 遺跡 7

—第20次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1056集



遺跡番号 MG A - 20  
調査番号 0755

2009

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い調査を実施した麦野A遺跡第20次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、主に弥生時代から中世の集落跡を確認すると共に、多数の土器や陶磁器等の生活用具が出土しました。これらは、当時の麦野地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、藤静枝氏をはじめとする数多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

## 例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市博多区麦野3丁目10番11において発掘調査を実施した麦野遺跡第20次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託および国庫補助事業として実施した。
3. 報告する調査の細目は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣・名取さつきが行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本・名取が行った。
6. 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、榎本・名取が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$  西偏する。
9. 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系（第II座標系）によるものである。
10. 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、井戸をSE、土坑をSK、貯蔵穴をSU、溝をSD、ビットをSPと略号化した。
11. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
12. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
13. 本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺跡名	麦野A遺跡	調査次數	第20次	遺跡略号	MGA-20
調査番号	0755	分布地図図幅名	麦野12	遺跡登録番号	020048
申請地面積	1,329.0m <sup>2</sup>	調査対象面積	648.0m <sup>2</sup>	調査面積	515.5m <sup>2</sup>
調査地	福岡市博多区麦野3丁目10番11			事前審査番号	19-2-360
調査期間	平成19(2007)年12月4日～平成20(2008)年2月12日				

## 本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
1. 麦野A遺跡と本調査区の立地	2
2. 調査区周辺のこれまでの調査	2
III. 調査の記録	5
1. 概要	5
2. 遺構と遺物	7
1) 据立柱建物(SB)	7
2) 穫穴住居(SC)	7
3) 井戸(SE)	8
4) 土坑(SK)	10
5) 貯藏穴(SU)	15
6) 溝(SD)	17
7) その他の遺物	18
3. 結語	18

## 挿図目次

第1図 麦野A遺跡位置図(1/25,000)	3
第2図 調査区位置図(1)(1/1,000)	4
第3図 調査区位置図(2)(1/500)	5
第4図 調査区南壁土層実測図(1/80)	6
第5図 調査区全体図(1/150)	(折り込み)
第6図 SB015実測図(1/60)	7
第7図 SC005・009実測図(1/40)およびSC005出土遺物実測図(1/3)	8
第8図 SE013実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3、1/4)	9
第9図 SK001・002・003・004・007・010実測図(1/40)	11
第10図 SK011・012・014・052・053・164・174実測図(1/40)	12
第11図 SK010・014・052・164出土遺物実測図(1/3)	13
第12図 SU006実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	14
第13図 SD008・168実測図(1/40)	15
第14図 SD008・168出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)	16
第15図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図(1/3)	17

## 図 版 目 次

- |      |  |   |
|------|--|---|
| 図 版1 | (1)調査区西側全景(西から)  | (2)調査区東側全景(西から)   |
| 図 版2 | (1)調査区南壁東側土層(北西から)<br>(3)SC009(南東から)<br>(5)SE013(北西から)         | (2)SC005(北東から)<br>(4)SE013(北西から)<br>(6)SK001(南東から)                |
| 図 版3 | (1)SK002(北から)<br>(3)SK004(東から)<br>(5)SK010(北東から)               | (2)SK003(西から)<br>(4)SK007(南東から)<br>(6)SK010遺物出土状況(北東から)           |
| 図 版4 | (1)SK011(南東から)<br>(3)SK014(北東から)<br>(5)SU006掘削状況(北西から)         | (2)SK012(南東から)<br>(4)SU006(南東から)<br>(6)SU006完掘状況(南から)             |
| 図 版5 | (1)SU006土層(南西から)<br>(3)SU006下層遺物出土状況(南東から)<br>(5)SD008南側(北西から) | (2)SU006上層遺物出土状況(南西から)<br>(4)SD008北側(北西から)<br>(6)SD008A-B土層(北西から) |
| 図 版6 | 出土遺物   |   |

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成19(2007)年8月7日付けで、福岡市博多区麦野3丁目10番11(敷地面積：1,329.0m<sup>2</sup>)における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、藤園藏氏より福岡市教育委員会宛てになされた(事前審査番号：19-2-360)。

これを受けた教育委員会埋蔵文化財第1課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野A遺跡に含まれていることから同年9月6日に確認調査を実施し、敷地全面のほぼ表土直下において古墳時代から中世と考えられる土坑やピット等を確認した。この調査成果をもとに両者で協議を行なった結果、敷地地盤が軟弱なため、敷地北側の共同住宅建築部分については杭打設工事を行う必要性があり、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、当該建物の建築面積648.0m<sup>2</sup>を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。

その後、11月30日に藤静枝氏を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、12月4日より発掘調査を、翌平成20年度に整理・報告書作成を行うこととなった。なお、今回の事業主体が個人であることから、これらにかかる費用の一部に国庫補助を適用した。

### 2. 調査の組織

調査委託：藤静枝

調査主体：福岡市教育委員会 文化財部 埋蔵文化財第1課

調査総括：埋蔵文化財第1課長 山口謙治

同課調査係長 米倉秀紀

調査庶務：文化財管理課管理係 鈴木由喜(調査) 古賀とも子(整理)

事前審査：埋蔵文化財第1課事前審査係長 吉留秀敏

同課主任文化財主事 宮井善朗

同課事前審査係文化財主事 上角智希(確認調査)

調査担当：同課調査係文化財主事 櫻木義嗣

調査作業：阿部純子 岡部安正 折居正勝 岸原千秋 田端名徳子 速山歎 永松弘恵 中村健三

中村幸子 名取さつき 野田淳一 花田則子 光安昌子 鶩崎哲夫

整理作業：木本恵利子 瞽口三恵子 松尾真澄

発掘調査から報告書作成に至るまで地権者の藤静枝氏、積水ハウス株式会社をはじめとする関係者各位には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 麦野A遺跡と本調査区の立地

玄界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から柏屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する麦野A遺跡は、このうち福岡平野に位置する。同平野の西側には背振山系に属する油山(標高: 597m)から北側に発達する丘陵が派生し、早良平野と面される。また、東側には三郡山地より派生した大城山(標高: 410m)の山麓から南北方向に月隈丘陵が延びて、柏屋平野との境界をなしている。また、平野内には御笠川、那珂川が博多湾へと北流し、沖積平野が形成されるが、河川の開析によつて段丘が南北に連なる。

本遺跡は、御笠川とその支流である諸岡川に挟まれた中位段丘上に立地する遺跡で、この段丘は、花崗岩風化礫層を基盤とし、Aso-4火砕流堆積による下層の八女粘土層および上層の鳥栖ローム層と呼ばれる堆積物からなる洪積台地である。今回の調査は、この鳥栖ローム層上面を造構面とした。また、北側の同様の段丘上には、狭い冲積層の鞍部を挟み、高畠遺跡、板付遺跡が連なる。また、南側には、南西の基部から派生する麦野B遺跡、麦野C遺跡、南八幡遺跡の各遺跡が展開し、侵食による狭い谷の開析によって八つ手状に舌状の支丘を複数派生させている。また、本遺跡も南端部の狭い尾根状の鞍部で、麦野C遺跡と結ばれ一連の段丘を形成している(第1図)。

本遺跡が占地する南北方向に長く延びる台地は、南北約1.2km、東西約0.4kmで、現況の地表面の標高は約12~16.5mを測る。現在は宅地造成により、谷部が埋没するが、戦前の地形図に拠れば、北側から開析する狭い谷が數本認められ、当時は水田となっている。また、台地の中央西側に標高16mの等高線が巡る緩いピークがあり、北側に支丘を派生させる。また、台地の南側には、2箇所の鞍部が認められ、南端部では上述のとおり麦野C遺跡に狭い尾根で繋がる。今回報告する第20次調査区は、ピークから北東約250mの台地中央部の東側緩斜面に位置し、同地形図では、大半が標高15mの等高線中に位置するが、東側は段落ちして、竹林となっている。なお、この段差は現況でも認められた。

### 2. 調査区周辺のこれまでの調査

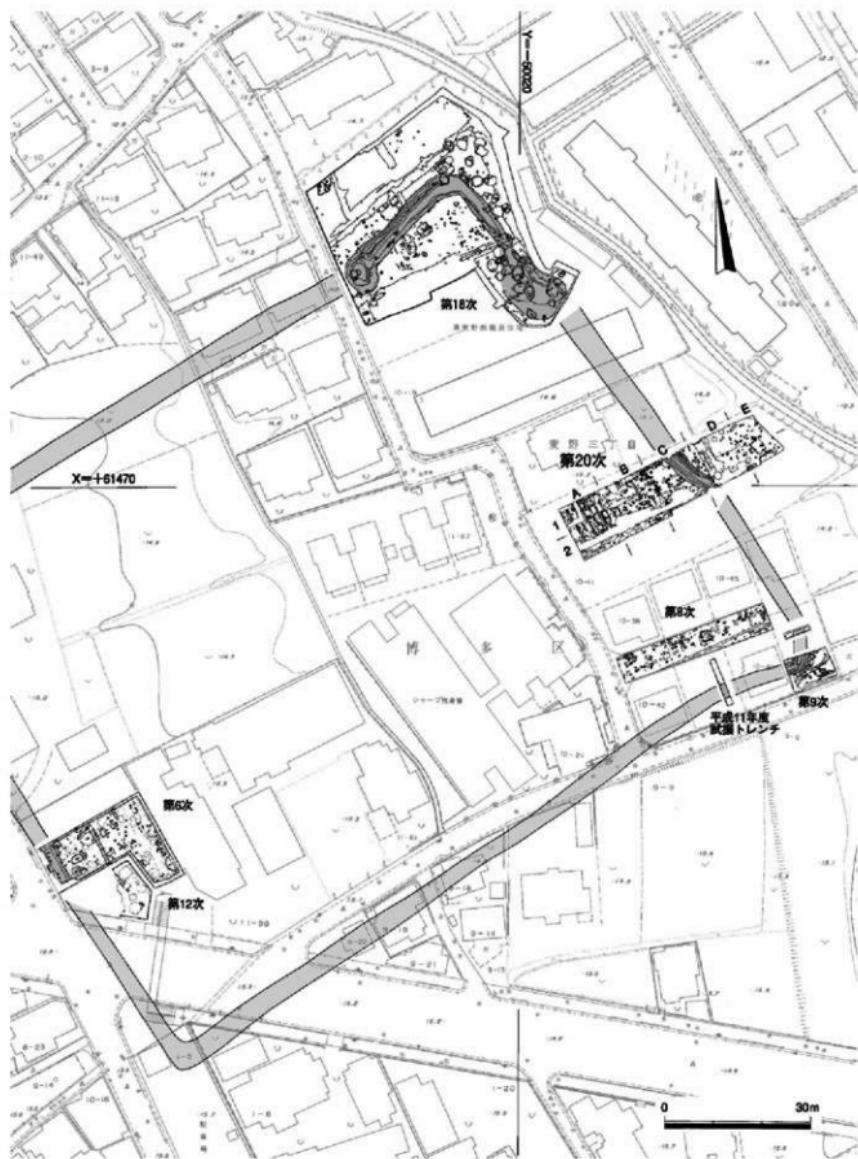
本遺跡では、これまで20次にわたる調査が実施され、縄文時代と推定される落とし穴状土坑も少数検出されているが、弥生時代から中世後半までの造構が主体を占める。この中でも主となる時期は古代で、竪穴住居で構成される集落を代表とするが、横列や溝、門等で構成される官衙的な造構が第7次調査で検出されており、注目される。なお、古墳時代の造構は、第13~19次調査区で検出されているのみで、極めて少ない。

ここでは、本調査区周辺の台地中央部の調査について、時代別に概観しておきたい(第2図)。まず、弥生時代の造構についてはこれまで検出例が殆どなかったが、第18次調査区や本調査区で、前期の竪穴住居や貯蔵穴が確認され、東側斜面に貯蔵穴、尾根線近くに竪穴住居を配置する集落が付近に展開することが予測される。古代では、奈良時代を主体に第6~8~18次および本調査区で竪穴住居が検出され、大半に竪穴を設ける。遺跡全体に該期の大規模な集落が形成される時期に相当する。また、第6次調査区やその北西約100mの谷頭に位置する第4次調査区では、平安時代の井戸や土坑等が確認されている。後者の調査区からは、縄文陶器や縄目叩きの瓦が出土しており、一般集落の様相とは異なる。中世前半期の造構は散見する程度で、定型化した集落の存在は窺えない。中世後半期では、第6~9~18次および本調査区において同一と推測される大規模な堀状の溝が確認されている。



- |          |          |          |         |          |
|----------|----------|----------|---------|----------|
| 1 麦野A遺跡  | 2 比恵遺跡群  | 3 那珂遺跡群  | 4 五十川遺跡 | 5 井尻A遺跡  |
| 6 井尻B遺跡  | 7 那珂君休遺跡 | 8 板付遺跡   | 9 高畠遺跡  | 10 路岡A遺跡 |
| 11 諸岡B遺跡 | 12 寺島遺跡  | 13 笹原遺跡  | 14 三筑遺跡 | 15 安野B遺跡 |
| 16 麦野C遺跡 | 17 南八幡遺跡 | 18 雜納隈遺跡 | 19 笠抜遺跡 |          |

第1図 麦野A遺跡位置図(1/25,000)



第2図 調査区位置図(1)(1/1,000)

### III. 調査の記録

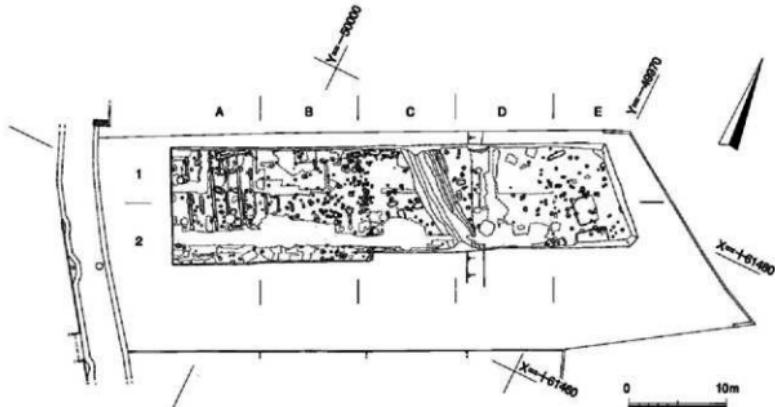
#### 1. 概要

今回報告する第20次調査区は、博多区麦野3丁目10番11に所在する。調査前の状況は、標高15.5m前後を測る家屋解体後の平地で、東側には「II.-1. 麦野A遺跡と本調査区の立地」で述べたとおり、段落ち部があり、敷地東端部では標高14.0m前後の平地となる。なお、この部分も同様に宅地で、更に東側には、台地端部に沿って北流する水路が設置されている。

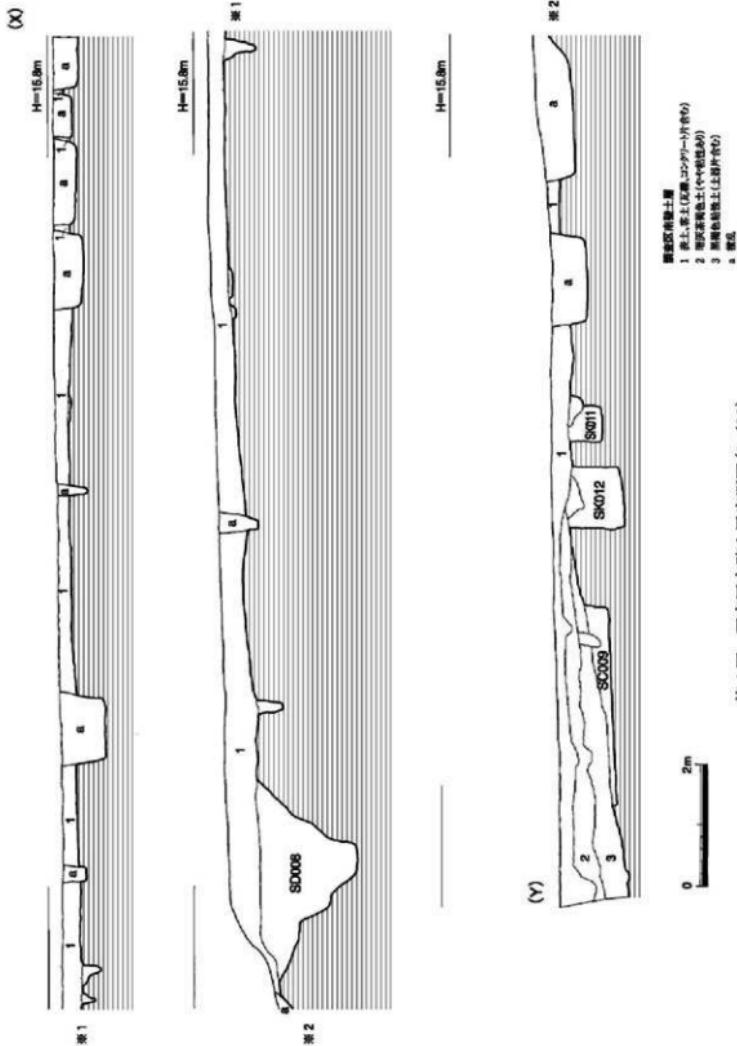
調査区の土層(第4図参照)は、基盤が黄茶褐色を呈する粘性の鳥栖ローム層で、台地尾根側の西から台地端部の東側に傾斜している。調査区東側の大半では、表土および客土(1層)直下が鳥栖ローム層となり、その標高は西端部で15.4mを測る。同層は、後述するSD008付近まで緩く傾斜して標高を減じ、現況の段落ち部およびUSD008を挟み、東側に向かって傾斜を強める。調査区東端部の台地端部付近では、標高約12.8mとなる。東端部では、鳥栖ローム層の傾斜に沿うように、1層下にやや粘性のある暗灰茶褐色土(2層)および黒褐色粘性土(3層)が自然堆積する。発掘調査は、鳥栖ローム層上面を遺構検出面とし、その上層の1~3層を重機で剥ぎ取って実施した。

今回の調査区では、遺構面の大半が表土直下に存在するため、調査前の家屋基礎や配管等による擾乱が鳥栖ローム層に及び、また尾根に近い東側や段落ち下部は削平を受けるものの、縄文時代と推測される落とし穴状土坑や弥生時代の堅穴住居・土坑・貯藏穴、古代の堅穴住居、中世の掘立柱建物・井戸・溝・柱穴等を確認できた。なお、出土遺物量は、コンテナケースにして8箱である。

発掘調査は平成19(2007)年12月4日から開始した。調査時の排土については、敷地内で処理を行わざるを得なかつたため、まず、段落ち上部までの西側約2/3の調査を先行し、排土反転後、残る東側1/3の調査を行うこととした。作業は、重機による南側の表土剥ぎ取りから着手し、翌日から重機による作業と並行しながら、発掘器材の搬入や調査区の壁面養生等を行なった。6日より遺構検出や擾乱除去等の人力作業を開始し、その後、検出遺構の掘り下げや、遺物の取り上げ、写真撮影、図化等の作業を順次進め、翌月1月22日に高所作業車による西側部分の全体写真を撮影した。翌日より重機によって排土を反転し、東側の表土剥ぎ取りを開始した。25日から同様の作業を進



第3図 調査区位置図(2) (1/500)



第4図 開発区南端土壤実測図(1/80)



第5図 調査区全体図(1/150)

め、2月8日に北側部分の全体写真を撮影した。その後、器材の片付けや敷地の清掃等を行い、12日に発掘器具等を撤収し、第20次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、「I.-1. 調査に至る経緯」のとおり、敷地面積1,329.0m<sup>2</sup>のうち648.0m<sup>2</sup>であったが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は515.5m<sup>2</sup>であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。

## 2. 遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置等を本文中で示す際には、調査時における平面座標を基準とした英字(西から東方向にA、B、・・)と数字(北側を1、南側を2)を組み合わせたグリッド表記を用いる(第3-5図参照)。

### 1) 据立柱建物(SB)

ピット状の遺構は、調査区全体で散漫に検出したが、B区からC区の西側にやや集中をみせ、深さ0.7~0.9mを測る深いものが認められた。調査中に検討を重ねたものの、調査区内で1棟分の建物を復元するには至らなかつたが、以下の柱列を据立柱建物の一部として報告する。

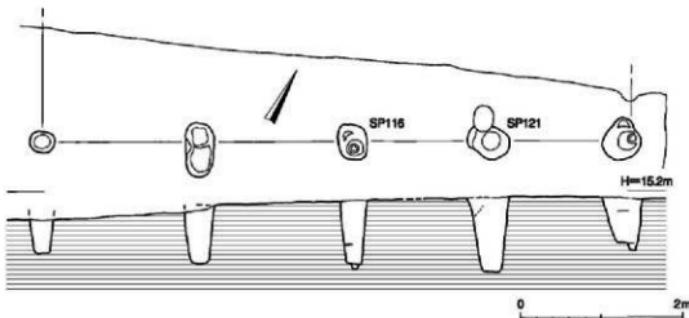
SB015(第6図) B・C-1区で確認した全長7.3m、柱間1.7~2.0mを測る4間分の柱列で、その方位は、N-62°-Eである。南側には、対応する柱筋がないことから、北側に展開する建物と推定される。柱穴は、円形もしくは梢円形プランを呈し、径30~60cm、深さ40~80cmを測る。覆土は灰茶褐色土を主体とする。遺物はSP116-121から中世と推定される土師器が数点出土したが、細片のため図化し得ない。覆土の色調や出土遺物から中世の遺構に位置付けておきたい。

### 2) 壺穴住居(SC)

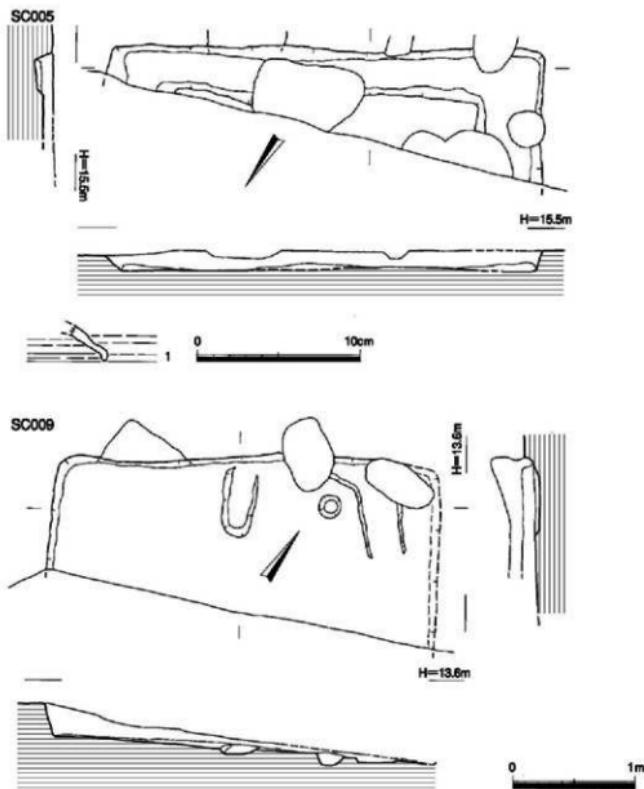
弥生時代および古代と推定される壺穴住居を各1軒確認した。

SC005(第7図) 調査区際のA-1区で確認した方形壺穴住居であるが、大半が調査区外に位置する。検出した南側の一辺の長さは3.5mを測り、壁は0.15mが遺存する。壁面に沿って、幅0.35~0.5m、床面からの深さ0.05mを測る幅広の壁溝が巡る。上面から掘り込まれる遺構が多く、主柱穴等は不明であった。また、窓も調査区内では検出できなかつた。覆土は暗黒褐色粘性土を主体とする。

出土遺物(第7図1) 須恵器壺蓋の口縁部片で、端部を短く屈折させる。内外面はヨコナデ調整を施す。色調は灰赤色を呈する。他に混入した備前焼播鉢や土師器が少量出土したが、いずれも細片



第6図 SB015実測図(1/60)



第7図 SC005・009実測図(1/40)および SC005出土遺物実測図(1/3)

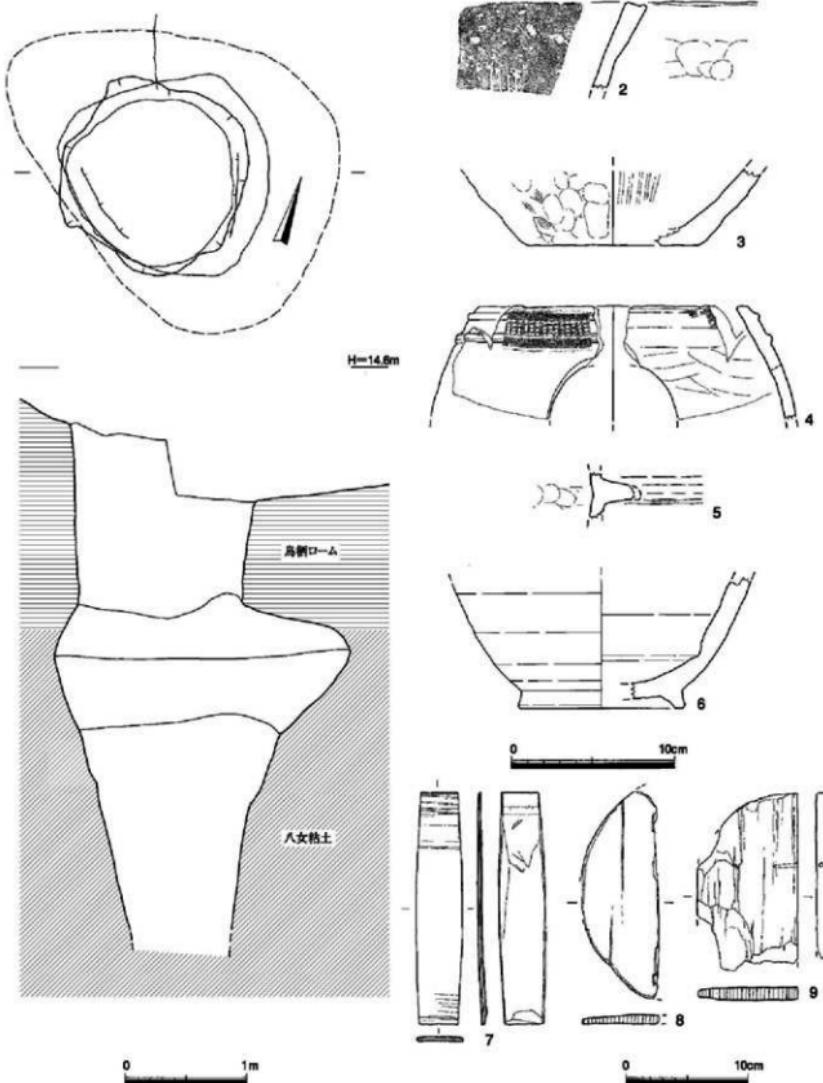
である。遺構の時期は、細片の須恵器からであるが、8世紀前半と推定される。

SC009(第7図) 東側緩斜面上の調査区北東際、E-2区で確認した方形堅穴住居で、南半部は調査区外に位置する。北東部の谷側の壁面は削平により大半が失われるが、調査区壁面の土層(第4図)から平面プランを復元した。検出した北西側の一辺の長さは3.1mで、遺存状況の良好な南西側の壁面の高さは0.3mを測る。床面上では浅い溝状の窪みや、径0.2m、深さ0.1mのピットを1基検出したものの、主柱穴と考えられる掘り込みは確認できなかった。覆土はロームブロック混じりの淡黒褐色粘土を主体とする。出土遺物は弥生土器と考えられる細片1点のみであった。

### 3) 井戸(SE)

中世後半代の素掘り井戸を1基検出した。

SE013(第8図) D-2区に位置する井戸である。上位が搅乱により削平されるため、検出時の平



第8図 SE013実測図(1/40)および出土遺物実測図(2-3-5-6は1/3、他は1/4)

面プランは不整であるが、径1.5m前後の円形を呈するものと考えられる。壁面は底面に向かってやや窄むが、地山である鳥居ローム層と八女粘土層の境界付近では、崩落のため、オーバーハングしている。覆土は、ハング部分までを含む上層部分がしまりのない淡茶褐色土で、崩落部分にはロームブロックが認められた。また、下層は暗灰褐色粘性土を主体とし、拳大の礫が投棄されていた。なお、標高約11.3mで著しい湧水があり、安全上、同レベル付近で掘削をとどめた。大半の遺物は下層から出土し、上層では細片が3点のみであった。なお、下層覆土中から出土した木製品(7~9)は、水滸に用いられた木桶等の一部の可能性が高い。

出土遺物(第8図2~9) いずれも下層出土の遺物である。2~5は土師質土器で、2・3は擂鉢である。2は口縁部片で、外面は指オサエ、内面は刷毛目調整後、擂目を加える。上面はヨコナデにより窄む。3は器面の風化がすすみ、内面の擂目が不鮮明である。外面には炭化物が付着する。4は風炉で、体部に円形の窓を有する。内側する口縁部外面には断面瀧鉢状の低い突帯を2条巡らせ、その間に細かい格子目のスタンプ文が施される。外面は風化するが、内面には板状工具によるナデおよび刷毛目調整が認められる。5は湯釜の鉢で、ヨコナデを施すが、下部に刷毛目が残る。6は高台付の須恵器壺である。体部外面は回転ヘラ削り、内面および高台部はヨコナデで、内底部にはナデを加える。混入品であろう。7~9は木製品である。7は板目材を用材とした板で、幅3.9cm、長さ19.0cmを測る。僅かに湾曲し、凸側の両端部に板縫じの痕跡が認められる。小形木桶の板材であろう。8・9は柾目材を円形に加工するが、欠損している。木桶や曲物等の底板の一部と考えられる。9の側面には結合するための方形の木釘穴が認められる。他に瓦質土器鉢等の細片が少量出土している。15~16世紀の井戸に位置付けられよう。

#### 4) 土坑(SK)

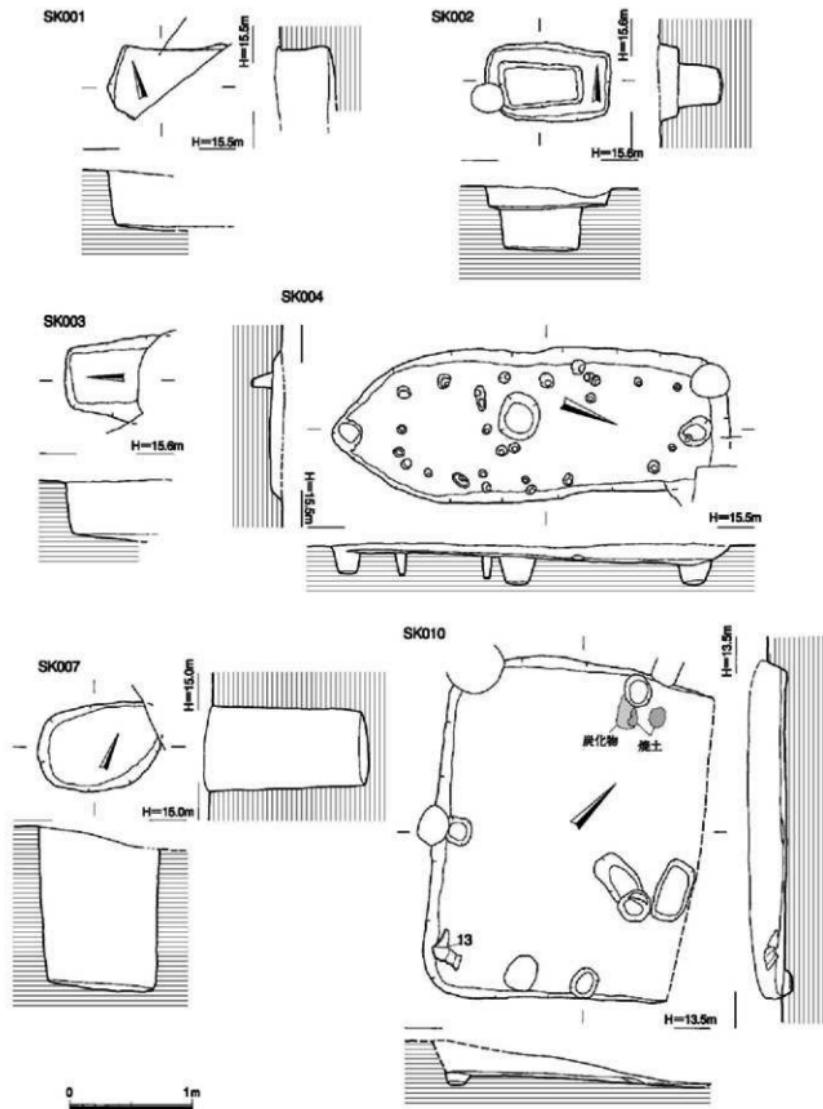
全体に出土遺物が少ないが、縄文時代と推定される落とし穴や、弥生時代ならびに中世の土坑を確認できた。以下、遺構番号順に13基の土坑を報告する。

SK001(第9図) A-2区で検出した端正な方形プランの土坑である。南東側を擾乱されたため、全容は不明であるが、現況から東西に長い長方形を呈するものと推定され、長さ1m以上、幅0.6m、深さ0.45mを測る。壁面は直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は黒褐色粘性土で、中位にはロームブロックが含まれる。出土遺物はないが、覆土の色調から弥生時代の可能性が考えられる。

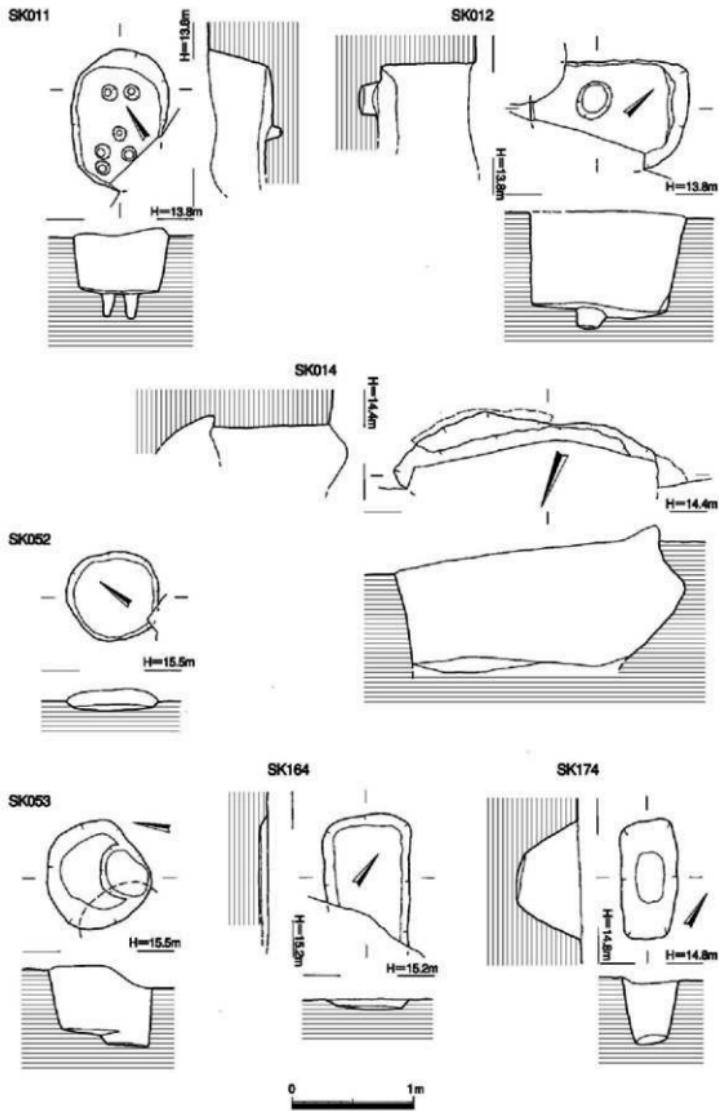
SK002(第9図) A-1区で確認した長方形プランの土坑で、内部は二段掘りをなす。SK001同様に整った掘り方で、壁面の傾斜は急である。上面では長さ1.05m、幅0.6m、下段では長さ0.7m、幅0.4mを測る。上面から底面までの深さは0.5mで、底面は平坦をなす。覆土はSK001に類似するロームブロック混じりの黒褐色粘性土を主体とする。また、同様に出土遺物はないが、弥生時代の土坑と推定される。

SK003(第9図) A-2区に位置し、端正な方形プランを呈する。南東側を擾乱されたため、全容は不明であるが、現況から東西に長い長方形を呈するものと推定され、長さ0.7m以上、幅0.7m、深さ0.5mを測る。壁面は直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は黒褐色粘性土で、中位にはロームブロックが含まれる。出土遺物はないが、覆土の色調から弥生時代の可能性が考えられる。

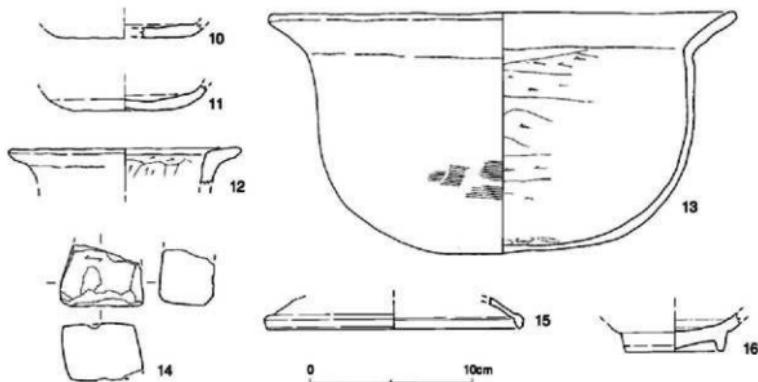
SK004(第9図) A-1・2区で検出した。長さ3.3m、幅1.2m、深さ0.15mを測る長方形を呈するが、南側は不整な形状である。底面は僅かに北側に傾斜し、多数のビットを検出した。長軸方向中央部の両端および中央に径0.2~0.4mのやや大きな3基のビットが位置し、壁面沿いを主体に径0.1m未満、深さ0.1~0.2mの小ビットが中央部を囲むように並ぶ。小ビットは底面が狭く、杭状のものを設



第9図 SK001-002-003-004-007-010実測図(1/40)



第10図 SK011-012-014-052-053-164-174実測図(1/40)



第11図 SK010-014-052-164出土遺物実測図(1/3)

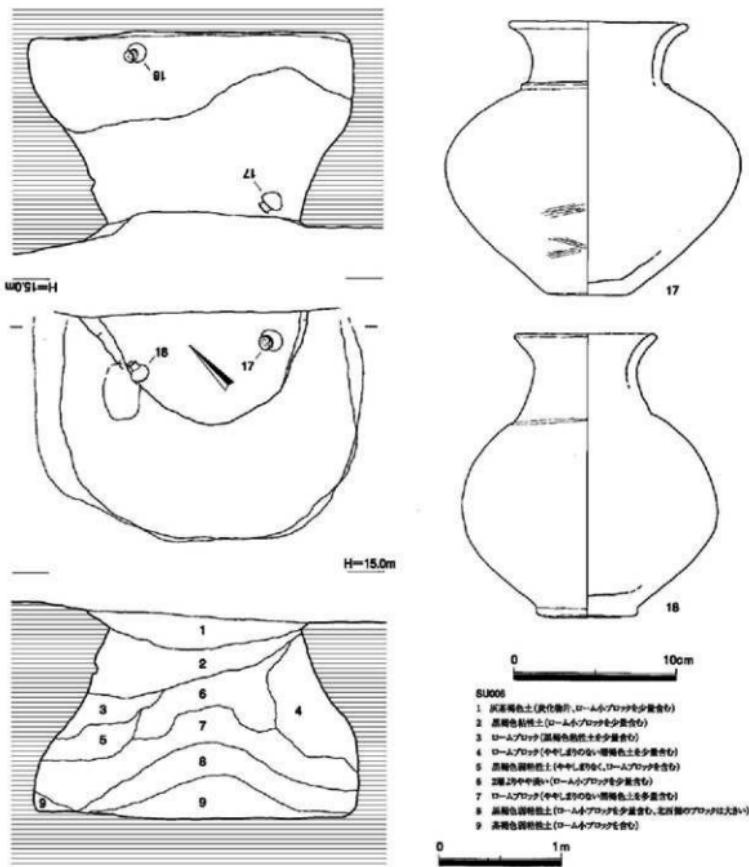
置した痕跡と推定される。覆土はロームブロックを少量含む黒褐色粘性土である。出土遺物には弥生土器が少量あるが、いずれも細片である。これらの遺物や覆土の色調から弥生時代と想定される。

SK007(第9図) C-2区に位置し、SD008に切られる落とし穴状の土坑である。造構面が東側へ傾斜する端部付近に占地する。平面プランは不整な隅丸長方形を呈し、長さ1m以上、幅0.7mを測る。壁面は直立気味に立ち上がり、深さ1.35mを測る。底面にピットは認められなかった。覆土は黒褐色粘性土が均一に堆積し、全体にローム小ブロックが少量混じる。出土遺物はないが、縄文時代の所産であろう。なお、本遺跡では、第11次調査(SX008)で検出例がある。

SK010(第7図) 東側緩斜面上のE-1・2区で確認した方形土坑である。検出当初は、古代以前の竪穴住居と想定していたが、中世の遺物が出土したことから土坑として報告する。北東側の壁面は削平により失われるが、図の破線部分までがほぼ平坦面を呈しており、長さ2.8m、幅約2.2m以上に復元できる。遺存の良好な南西側では、深さ0.3mを測る。底面では、ピット状の掘り込みを数基検出したが、深さ0.1m前後の浅いものであった。また、北側コーナー付近では、炭化物および焼土の分布が認められた(網掛け部分)。南側コーナーでは、土師質土器の鍋(13)が底面上で出土した。

出土遺物(第11図10~13) 10-11は土師器杯の底部である。共に器面が風化するが、外底部は回転ヘラ切りの痕跡が残る。12は復元口径13.6cmを測る小形の土師器で、鉢であろう。内面にヘラ削りを施す。13は土師質土器の鍋で、約8割程度が遺存する。口径28.3cm、器高14.7cmを測る。「く」字状を呈する口縁部は長く延びる。内外面共に器面の大半が風化するが、外面の一部に細かい刷毛目調整が残り、焼が付着する。また、内面は横方向のヘラ削りを施す。他に細片の土師器等がある。これらの出土遺物から12世紀前半頃の遺構と考えられる。

SK011(第10図) D-2区の東側緩斜面上で検出した落とし穴状の土坑で、同様のSK012を切る。南側の一部は調査区外に延びるが、平面プランは不整な隅丸長方形をなすものと考えられ、長さ1.2m以上、幅0.8mを測る。壁面は直立気味に立ち上がり、深さ0.5mを測る。底面には深さ0.1~0.2mの計6基の小ピットが認められた。覆土は黒褐色粘性土で、全体にローム小ブロックが少量混じる。出土遺物はないが、縄文時代の所産であろう。



第12図 SU006実測図(1/40)および出土物実測図(1/3)

SK012(第10図) D-2区の東側緩斜面上に位置する落とし穴状の土坑で、前述のSK011に切られる。また、南側の一部は調査区外に延びるが、長さ1.3m、幅0.9mを測る隅丸長方形をなすものと想定される。壁面の立ち上がりは急で、深さ0.8mを測る。底面では径0.3m、深さ0.15mのピットを1基検出した。覆土はSK011に類似し、同様に出土遺物はないが、縄文時代の所産であろう。

SK014(第10図) D-1区の東側緩斜面上で検出した。遺構の大半が調査区北側に位置するため、詳細は不明であるが、地下式土坑の可能性を有する。壁面は急で、オーバーハングする部分が認められた。現況の深さは1.4mであるが、更に深くなるものと推定される。覆土はしまりのない淡灰茶褐色土で、前述したSE013の上層に類似する。

出土遺物(第11図14) 砂岩製砥石の端部片である。欠損部を除く各面が砥面として利用されている。他に須恵器の細片が1点出土している。共に覆土の最上層から出土した。地下式土坑としての可能性やSE013との覆土色調の類似から中世後半期の遺構と推定される。

SK052(第10図) 調査区北西端のA-1区で確認した円形土坑で、SK053を切る。径0.7m、深さ0.2mを測り、覆土は灰茶褐色土である。

出土遺物(第11図15) 復元口径15.2cmを測る須恵器壺蓋である。口縁端部は断面三角形状を呈し、内外面にヨコナデ調整を施す。やや軟質の焼成である。他に土師器の細片が数点出土している。

SK053(第10図) A-1区に位置し、SK052に切られる。平面プランは径0.8m前後の不整円形を呈する。底面は北側に平坦面があり、南側にピット状の掘り込みを有する。覆土は黒褐色粘性土を主体とする。出土遺物には少量の赤生土器もしくは土師器の細片、須恵器片が1点ある。

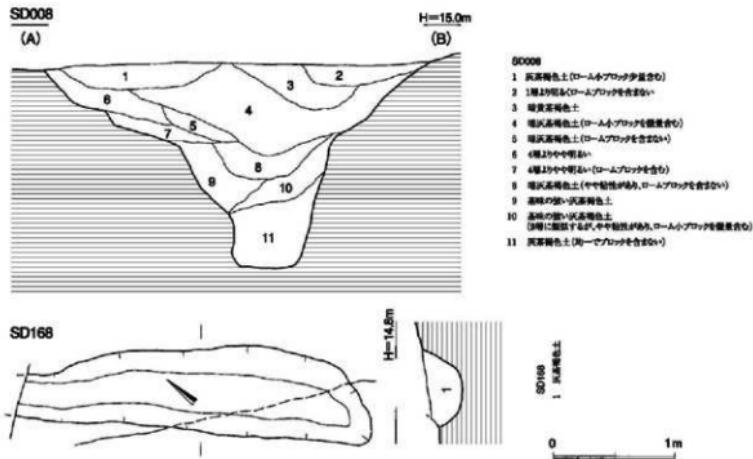
SK164(第10図) C-2区で検出した土坑で、南東側を搅乱に切られる。現況から隅丸長方形を呈するものと考えられ、長さ1m以上、幅0.7mを測る。深さは0.1mと浅く、覆土は灰茶褐色土である。

出土遺物(第11図16) 白磁碗等1類で、見込みの釉を輪状に搔き取る。他に土師器、須恵器の細片が数点出土した。12世紀後半以降の遺構であろう。

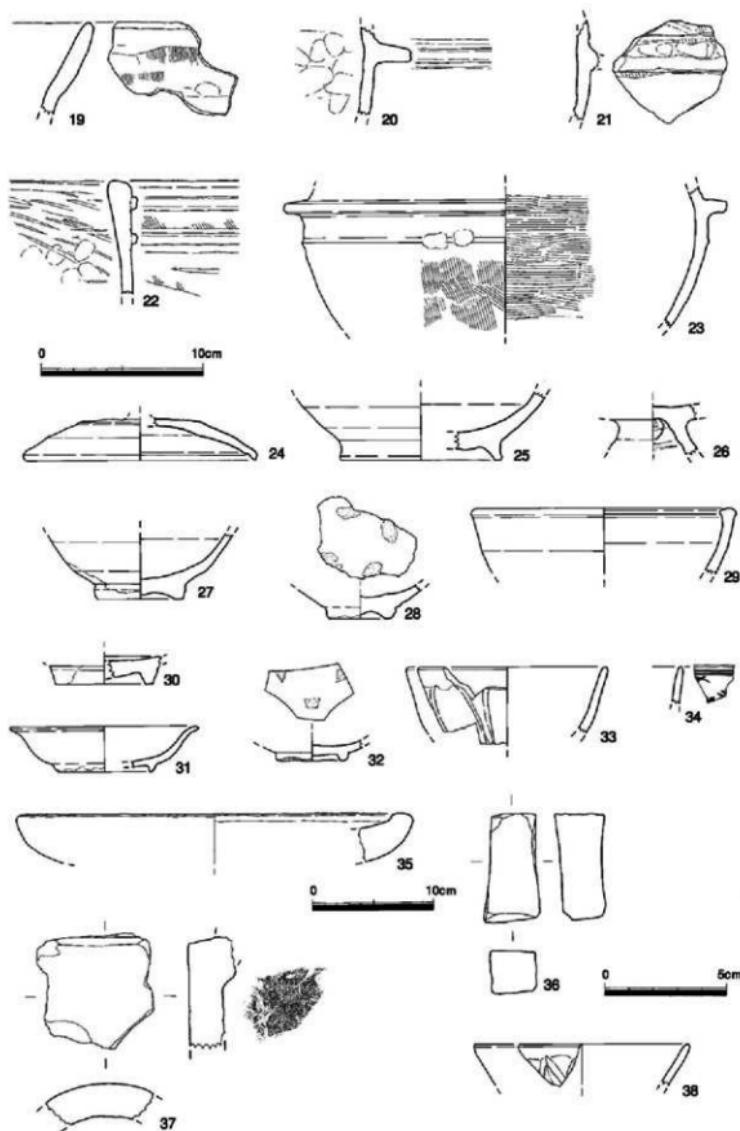
SK174(第10図) D-1区で確認した隅丸長方形の小型土坑である。長さ1.0m、幅0.45m、深さ0.5mを測る。長辺の壁面の立ち上がりは急であるが、短辺では緩い。覆土はロームブロックを少量含む灰茶褐色土を主体とする。出土遺物は土師器細片が1点のみである。

##### 5) 貯藏穴(SU)

SU006(第12図) C-1区に位置する貯藏穴で、北半部をSD008に切られるが、円形プランと考えられる。断面はフラスコ状を呈し、深さは1.7mを測る。平坦な底面は径2.7mで、掘り込み等は認められない。覆土は下層(7-8層)では凸レンズ状に堆積し、中層(3-6層)ではロームを主体とする崩落土が顕著である。上層(1-2層)では2層が流れ込んだ後、皿状の窪みに1層が自然堆積する。



第13図 SD008-168実測図(1/40)

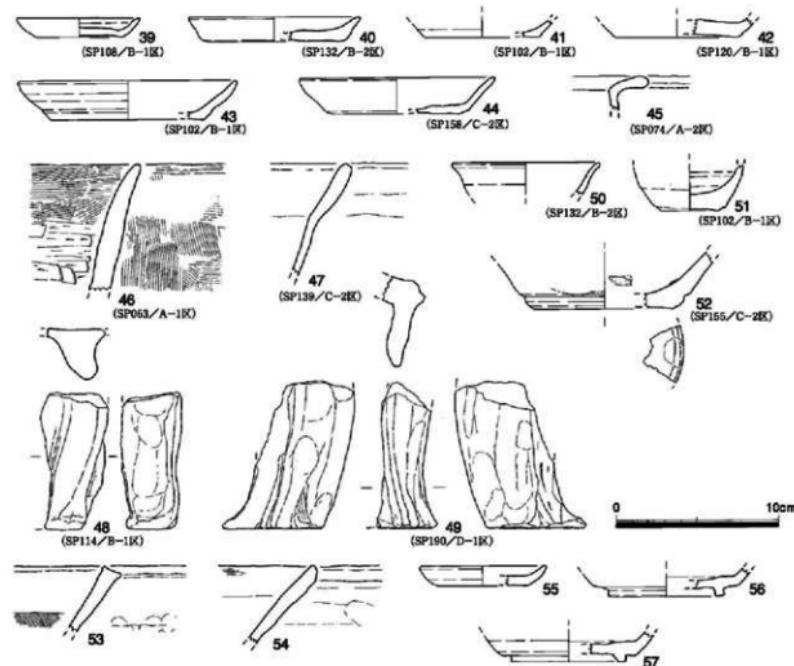


第14図 SD008-168出土遺物実測図 (37は1/2、35は1/4、他は1/3)

出土遺物(第12図17-18) 共に弥生土器の小壺である。口縁部を部分的に欠損するが、頸部以下は完存する。17は2層出土で、緩く外反して立ち上がる頸部下に断面三角形の低い突帯を貼付する。扁球状の胴部の下半は直線的に底部に続く。器面の大半は風化するが、胴部外面には横方向のヘラ研磨が認められ、内面にはヘラナデ調整を施す。口径10.6cm、器高16.7cmを測る。18は大半が8層中に埋没していたが、下端は9層中に位置する。ただし、床面出土ではない。やや長めに外反する頸部下には、鈍い段が認められ、僅かに赤色顔料が残る。胴部は球状を呈し、やや厚手の底部は円盤状をなす。器面の風化により調整は不明瞭である。口径8.4cm、器高17.3cmを測る。他に中層より弥生土器の細片、1層より須恵器片が出土したが、少量である。18の小壺から弥生時代前期後半の貯蔵穴と考えられる。

#### 6) 溝 (SD)

SD008(第4-5-13図) 調査区西側の段落ち際、C-D-1・2区に位置する大溝で、北西-南東方向に直線的に延長し、両側は調査区外に延びる。北側では、SD168を切る。「3. 結語」で後述するが、北西側の延長部が第18次調査で、南東側延長部が第9次調査で検出され、方形区画溝の東辺中央部に相当する。上面幅3.0~3.5m、底面幅0.4m前後、深さ1.7m前後を測り、断面は箱掘状を呈する。底面の標高は約13.0m前後で、調査区内では大きな高低差は認められない。完掘後の壁面には、テラスや段が複数認められたが、土層観察によると数度の掘り直しの結果によるものと考えられる。また、溝底や壁面には生糞による凹凸が著しく、覆土に水性堆積物が顯著に認められないことから、



第15図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)

空堀であった可能性が高い。出土遺物は、おおよそ1層から7層までを上層、8~10層および11層の上位を中層、以下を下層遺物として取り上げたが、遺物量は少ない。

出土遺物(第14図19~37) 19~20は土師質土器の細片で、19は鍋の口縁部、20・21は湯釜の鉢部である。19の外面には煤が付着する。22・23は瓦質土器である。22は口縁下に断面方形の2条突帯を貼付する。23は湯釜で、外面に刷毛目を施す。24~26は混入した古代の須恵器で、24は壺蓋、25は壺底部、26は高杯脚部である。27・28は朝鮮王朝の陶器碗で、粗い胎土に満った灰白色の釉が施される。29は中国陶器の鉢もしくは盤で、暗赤褐色の粗い胎土に緑灰色の釉が掛けられる。30~32は白磁で、30は碗、31・32は皿である。端反り口縁の31は先細りの高台疊付きのみが露胎となる。32は高台に抉りを有し、釉はやや黄味をおびる。33は明代の龍泉窯系青磁碗で、幅広の蓮弁文を施す。34は明代の染付碗口縁部片で、外面に2条の界線を配する。35は凝灰岩製下白の受け皿部で、36は砂岩製の手持ち砥石である。37は玉様式の丸瓦で、須恵質の焼成である。19・21・25・28~30・32~34・36が上層、20・22~24・26・31・35・37が中層、27が下層出土である。以上の出土遺物から16世紀代の構に位置付けられる。

SD168(第13図) C-1区の調査区際で検出した断面逆台形の浅い溝で、SD008の東側に並行する。北側は調査区外に延長するが、南端部をSD008に切られる。幅0.4~0.7m、深さ0.3mを測る。

出土遺物(第14図38) 龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、鎮蓮弁文を外面に施す。他に土師器および須恵器の細片が少量出土している。

### 7) その他の遺物

最後にビット(SP)および遺構検出時に出土した遺物について報告を行う。

ビット出土(第15図39~52) 39~41は回転糸切り底の土師器小皿、42~44は土師器壺である。44は風化が著しいが、他の外底部は回転糸切りである。45は弥生土器の壺、46は土師器の瓶であろう。47~49は土師質土器で、47は口縁部を肥厚させる鍋である。48・49は移動式壺の下端部である。50は端反りの白磁小碗、51は外底部露胎の龍泉窯系青磁の壺である。52は越州窯系青磁の碗II類で、見込みおよび外底部に目跡が残る。なお、出土遺構は、遺物番号の下にグリッド名と共に記載している。

遺構検出時出土(第15図53~57) 53・54は土師質土器の鉢である。55は土師器小皿で、外底部は摩滅する。56・57は須恵器壺身で、断面方形の低い高台を貼付する。

### 3. 結語

最後に今回の調査で検出した遺構のうち、16世紀代に位置付けられるSD008大溝について若干の考察を行っておきたい。本文中でも触れたように、SD008の両方向の延長部は第18次および第9次で確認されている。また、両調査区では西側に折れる屈曲部も併せて検出されており、方形区画の東辺を復元することができる。北辺については第18次で約30mが西側へ延びるもの、その延長は現在のところ未確認である。また、南辺は第9次調査の延長の一部が試掘トレンチで検出されているが、同様に延長部での調査は行われていない。なお、西辺を想定する積極的な材料はないが、ほぼ同時期の第6次調査SD14を該当させて方形区画を復元した(第2図)。ただし、同様の箱型ながら、底面の幅が広く、やや疑問を残す。この復元区画は、内法で南北約110m(約1町)、東西約150mを測る規模となり、掘削時期や溝の形態、埋土の状況等から戦国期の城館周囲に掘削された空堀であった可能性が高い。ここで、天正9(1581)年に戸次鑑連が筑紫広門の那珂郡便入に備え、麦野村に軍勢を置いた記事(『豊前覚書』)が想起されるが、現在のところ関連性を裏付ける材料に乏しい。今後はまず、区画内部の建物遺構等の配置や土星の有無、東辺の確認等を進め、城館構造を明らかにしていく必要がある。

# 図 版



作業風景



(1) 調査区西側全景(西から)



(1) 調査区東側全景(西から)

図版 2



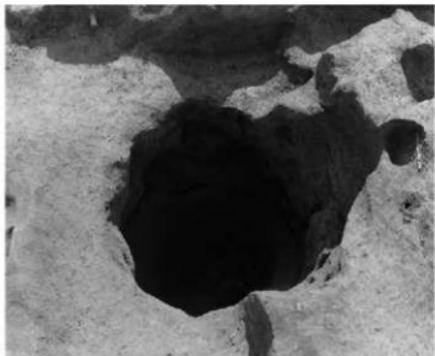
(1) 調査区南壁東側土層(北西から)



(2) SC005(北東から)



(3) SC009(南東から)



(4) SE013(北西から)



(5) SE013(北西から)



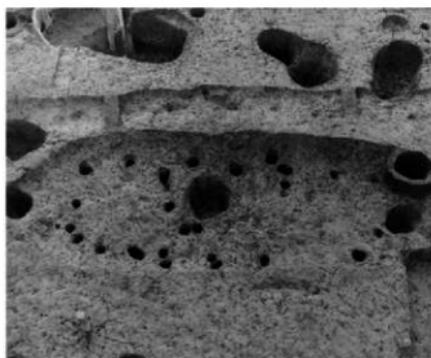
(6) SK001(南東から)



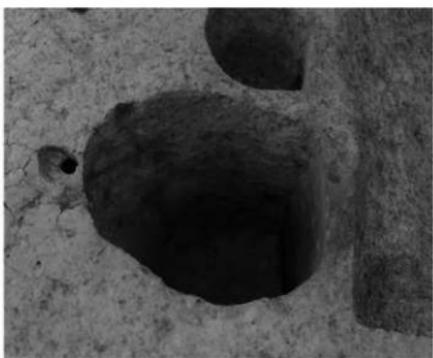
(1) SK002(北から)



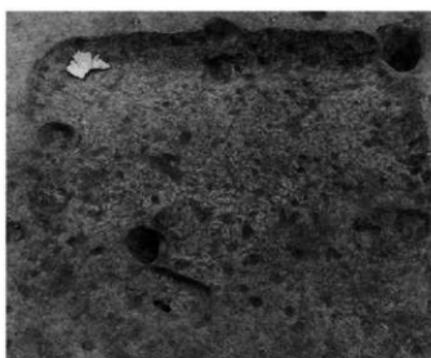
(2) SK003(西から)



(3) SK004(東から)



(4) SK007(南東から)



(5) SK010(北東から)



(6) SK010遺物出土状況(北東から)

図版4



(1) SK011(南東から)



(2) SK012(南東から)



(3) SK014(北東から)



(4) SU006(南東から)



(5) SU006 堀削状況(北西から)



(6) SU006 完掘状況(南から)



(1) SU006土層(南西から)



(2) SU006 上層遺物出土状況(南西から)



(3) SU006 下層遺物出土状況(南東から)



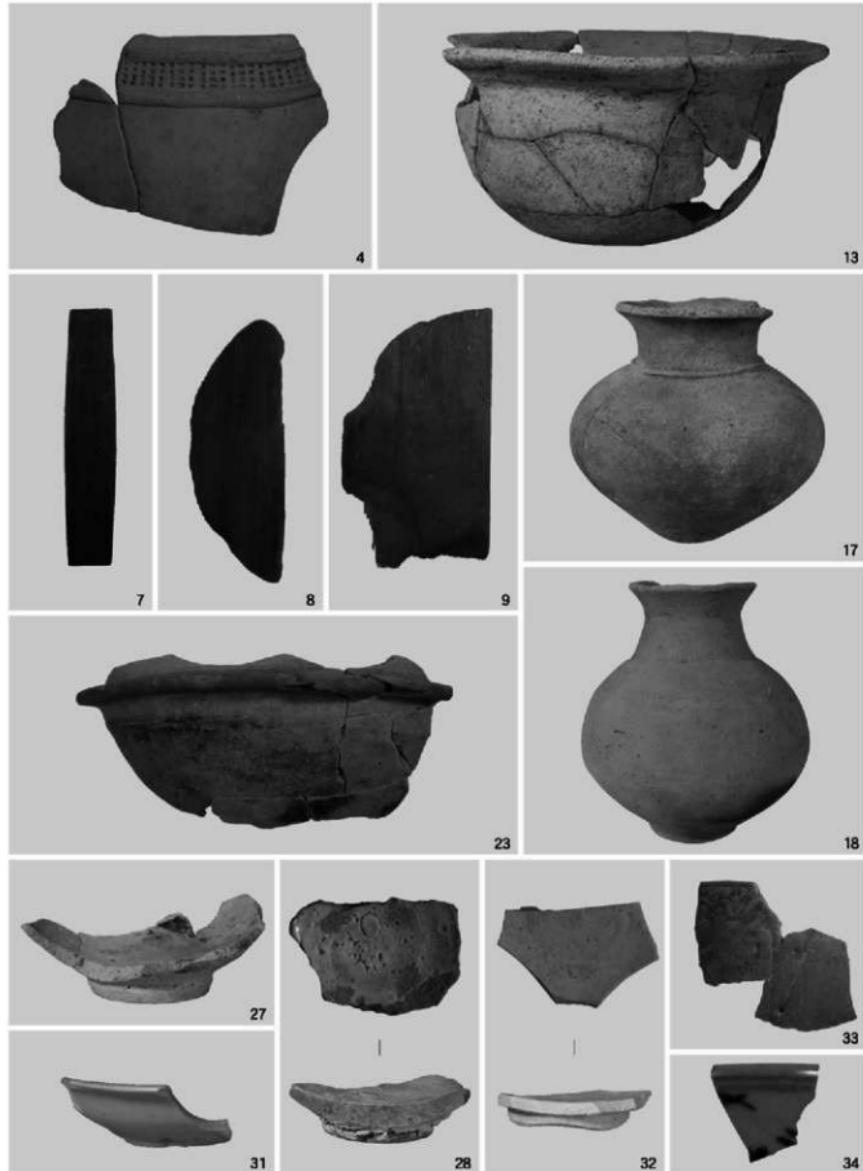
(4) SD008北側(北西から)



(5) SD008南側(北西から)



(6) SD008A-B土層(北西から)



出土遗物

## 報告書抄録

ふりがな	むぎのえーいせき 7 一だい 20 じちょうさほうこくー					
書名	麦野A遺跡7					
副書名	-第20次調査報告-					
巻次						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第1056集					
編著者名	桜木義嗣					
編集機関	福岡市教育委員会					
発行機関	福岡市教育委員会					
発行年月日	2009年3月31日					
郵便番号	810-8621					
住所	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号					
電話番号	092-711-4667					

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)			
麦野A遺跡 第20次	福岡県福岡市 博多区麦野 3丁目10番11	40132	0048	33° 11'	130° 42'	2007.12.04 ~ 2008.02.12	515.5 共同住宅建設
<b>所取遺跡名</b> 離別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項							
麦野A遺跡 第20次	集落	縄文	落とし穴 3				これまで本遺跡で検出例の少なかった弥生時代の集落の一部を検出することができた。貯蔵穴の分布からその主体は、本調査区北側約500mの第18次調査区周辺にあり、本調査地点は集落の縁辺部と想定される。
		弥生	堅穴住居 1 貯蔵穴 1 土坑	1 1 1	33° 11'	130° 42'	また、戦国期の大溝は、周辺高差成果から1町四方以上に復元できる大方形区画溝の東辺の一部で、城館を囲繞する空堀の可能性が高い。
		古代	堅穴住居 1	1	土器類、須恵器		
	中世	掘立柱建物 1			土器類、土器質土器、瓦質土器		
		井戸 1			中国陶器、中国高麗陶磁器(陶器・白磁青磁・染付)、朝鮮王朝高麗陶磁器、瓦、石製品(石臼・砥石)、木製品		
		土坑 2					

## むぎの 麦野 A 遺跡 7

—麦野A遺跡第20次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1056集

2009(平成21)年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号  
(092)711-4667

白刷 金丸印刷株式会社  
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-46-1  
(092)621-4257